

元気な高齢者の生活意識に関する基礎的研究 : QOL 向上を目的としたサービスデザインの創出に向けて

田村, 良一
九州大学

古屋, 繁
芝浦工業大学

都甲, 康至
九州大学

<https://hdl.handle.net/2324/4776901>

出版情報 : Bulletin of Japanese Society for the Science of Design. 66 (1), pp.19-28, 2019-07-31. Japanese Society for the Science of Design

バージョン :

権利関係 : (c) 2017 日本デザイン学会

元気な高齢者の生活意識に関する基礎的研究

— QOL 向上を目的としたサービスデザインの創出に向けて

A Basic Study on the Life Consciousness of the Healthy Older People

—Toward the Creation of Services Aiming at Improving the QOL

● 田村良一

九州大学

TAMURA, Ryoichi

Kyushu University

● 古屋繁

芝浦工業大学

FURUYA, Shigeru

Shibaura Institute of Technology

● 都甲康至

九州大学

TOGO, Yasushi

Kyushu University

● Key words : Life Consciousness, Healthy Older People, Service Design

要旨

本論文は、今日の少子高齢社会を踏まえ、元気な高齢者に焦点を当て、生活の質 (QOL:Quality of Life) の向上を目的とするサービスの創出に向けた端緒として、日常生活の意識について特徴を明らかにしたものである。

東京都および九州7県に在住する60～74歳の男性の独居世帯603名、同居世帯1074名、女性の独居世帯330名、同居世帯1108名を対象として、日常生活における満足度、楽しさ、不安、生きがいなどの9設問から構成されるWebアンケート調査を実施した。その結果、生活意識の課題という観点からは、楽しさ、生きがいにおいては男性独居、不安においては女性独居に注力する必要があると考えられた。また、生活意識の向上や改善という観点からは、性別の違いを基本としながら、男性では世帯構造の違いも考慮した上で、3種類の生活意識から抽出された因子やクラスタをもとに、新たなサービスのデザインの検討が可能であると考えられた。

Summary

In this paper, as a starting point for the creation of services aiming at improving the quality of life (QOL) based on aging society, we clarified the characteristics of the consciousness of everyday life of the healthy older people.

We conducted a web questionnaire survey which consists 9 questions such as fun, anxiety, ikigai in daily life for 603 men living alone, 1074 men, 330 women living alone and 1108 women who are aged between 60 and 74 and live in Tokyo and 7 prefectures in Kyushu as a target. As a result, it is necessary to focus on men living alone in fun and ikigai, and a women living alone in anxiety from the viewpoint of life consciousness issues. In addition, from the viewpoint of improvement of life consciousness, focusing differences in household structure among men while using differences in gender as the basis, it is able to consider new services based on the factors and clusters extracted from the three types of life consciousness.

1. はじめに

我が国の向こう数十年の社会・経済を語る上で外せないキーワードの一つが「高齢化」である。高齢化率は上昇を続け、2030年には31.6%、2060年には39.9%まで上昇すると予測されている。また、高齢者人口も2042年には3878万人まで増加すると予想されている〔注1〕。これまで高齢者というと福祉の観点から捉えられることが多かったが、加齢に伴い全ての能力が低下するわけではなく、その多くは肉体系でも精神面でも元気である〔注2〕。

一方、家族類型別世帯数をみると、「夫婦と子から成る世帯」は減少し、一般世帯に占める単独世帯の割合は2005年の29.5%から2030年には37.9%に上昇する。世帯主年齢別に単独世帯の割合をみると、2030年には世帯主年齢が65歳以上では37.4%、75歳以上では39.5%以上に達する〔注3〕。「一人暮らし」高齢者が増加する背景には、非婚者や離婚者の増加があげられるが、特に男性の生涯未婚率 (50歳時点で一度も結婚したことのない人の割合) の上昇は著しく、2015年には23.4%に上っている〔注3〕。

このような背景のもと、昨今、大都市近郊の団地などでは多くの孤立 (孤独) 死報道もなされている。長寿社会の生活の質 (QOL:Quality of Life) は、寿命の延伸とともに、高齢者がどのような最期を迎えることができる社会なのかを問われている〔注4〕。

そこで本研究では、元気な高齢者のQOL向上を目的としたサービスデザインの創出を最終的な目的とした前段階の基礎的研究として、性別と世帯構造 (独居世帯と同居世帯) の組み合わせで生じる男性の独居世帯 (以下、男性独居と記す) と同居世帯 (以下、男性同居と記す)、女性の独居世帯 (以下、女性独居と記す) と同居世帯 (女性同居と記す) の4つの基本属性に着目して、生活意識の観点から特徴を明らかにすることを目的とした。

2. QOL とサービス

2.1. QOL の定義

一般的に、生活の質、人生の質、生命の質と訳されている。QOLは“Life”がもつ意味が広範なため、その解釈も多様である。研究領域や目的に応じて捉え方が異なり、QOLはそれぞれの目

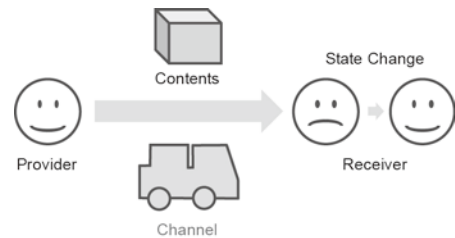


図1 サービスの定義 [注7]

的に応じて操作的な抽象概念として取り扱われているので現状である [注5]。

これまでのQOL研究をみても、大きく医学的領域における考え方と老年学および社会心理学的領域における考え方により進められてきている [注6]。すなわち、医学的領域では、健康(病気)との関係を強く意識し、治療の効果を測定することを目的に、主に事実として第三者による観察が可能な要素によりQOLを捉えようとしている。一方、老年学および社会心理学領域では、健康との関連を意識しつつも、日常生活全体や人生に対する本人しかわかり得ない主観的な要素によりQOLを捉えようとしている。前者は健康関連QOLと呼ばれ、身体機能、メンタルヘルス、日常役割機能、体の痛み、健康観、活力、社会生活機能などの要素により評価される。後者は主観的QOLと呼ばれ、モラール、生活満足度、主観的幸福感として評価される。両者のアプローチは、いずれかが有効と言うことではなく、高齢者のQOLを捉える上で共に重要と考えられる。

2.2. サービスの考え方

サービスの定義にはさまざまなものがあるが、サービス工学においては、「サービスの供給者であるプロバイダが、対価を伴って受給者であるレシーバが望む状態変化を引き起こす行為」と定義され、図1に示す模式図が提示されている [注7]。コンテンツとは、サービスの供給においてレシーバが望む状態変化を直接的に引き起こす構成要素であり、チャンネルとはコンテンツに対して伝達、供給、増幅等の作用を及ぼすことにより、レシーバの状態変化に間接的に寄与するデバイスである。

2.3. 本研究で目的とするサービスデザインとQOLとの関係

本研究は前述したとおりQOL向上を目的としたサービスデザインの創出を最終的な目的としている。サービスの定義で示されている「受給者であるレシーバが望む状態変化を引き起こす行為」と「QOLの定義」を比較しながら両者の関係を考察すると、本研究におけるサービスデザインとは、健康関連QOL、あるいは主観的QOLを向上させることを目的とするものと言える。しかし、前者は医学的領域の範疇であることから、後者に着目することにした。

主観的QOLについては、前述したとおりモラール、生活満足度、主観的幸福感に関する主観的QOL尺度について、理論的妥当性や構成概念妥当性、因子妥当性などが検討されてきている。しかし、健康関連QOLの場合と異なり、評価尺度自体の妥当性や信頼性に関わる問題が多く報告されている [注6]。本研究は、QOLについて議論することが目的ではないため、既往の高齢者意識に関する報告書 [注8～12] で用いられている設問のなかから、前述した日常生活全体や人生に対する本人にしかわかりえない主観的な要素に関する設問内容であるかどうか

かを基準として、筆者らが協議の上で判断し、「日常生活の満足度」を総合的な評価基準として位置づけ、その評価に影響すると考えられる「日常生活の楽しさ」、「日常生活の不安」、「日常生活の生きがい」の3種類の生活意識について調査をすることにした。

3. 生活意識の調査

3.1. 調査の対象者と方法

調査の対象者は、民間調査会社のモニターとして登録されている東京都および九州7県に在住している60～74歳の男性独居2125名、男性同居5139名、女性独居991名、女性同居2905名である。調査は、2016(平成28)年1月に男性独居、3月に男性同居、女性独居および女性同居に対して、Webアンケート調査を実施した。

居住地については、筆者らの継続研究における利便性と、前述した既往の高齢者意識に関する報告書 [注8～12] で用いられている4つの都市規模区分 [注13] での比較を見据えて1都7県とした。また年齢については、年齢層ごとの比較を通して時系列的な傾向を把握するため、前期高齢者に区分される65歳～74歳に加えて、直近の高齢者予備軍である60～64歳も加えることにした。

3.2. 調査の内容

調査の内容は、健康状態に関する「設問1：介護認定の有無とレベル」、「設問2：健康上の問題による日常生活の影響」、生活意識に関する「設問3：日常生活の満足度」、設問3の評価に影響すると考えられる「設問4：日常生活の楽しさ」、「設問5：日常生活の不安」、「設問6：日常生活の生きがい」、設問4～6の評価に影響すると考えられる具体的な生活に関する「設問7：日常生活で楽しさを感じる活動」、「設問8：日常生活で不安を感じる懸念事項」、「設問9：日常生活で生きがいを感じる生活シーン」の9設問である。なお、設問7では既往の報告書 [注8, 9, 11] の日常生活の楽しさに関する設問で用いられている活動を統廃合した29種類、設問8では既往の報告書 [注8, 9, 10] の日常生活の不安に関する設問で用いられている懸念事項を統廃合した16種類、設問9では既往の報告書 [注9, 10, 12] の日常生活の生きがいに関する設問で用いられている生活シーンを統廃合した13種類を用いることにした。

回答方法は、設問1については「認定を申請していない・認定を申請中・認定申請したが自立と認定された・要支援1・要支援2・要介護1・要介護2・要介護3・要介護4・要介護・認定されているが要介護度はわからない」の選択肢のなかから

表1 調査対象とした回答者の年齢別にみた内訳

	60～64歳	65～69歳	70～74歳	合計
男性 独居	292人 48.4%	232人 38.5%	79人 13.1%	603人 100.0%
	463人 43.1%	432人 40.2%	179人 16.7%	1074人 100.0%
女性 独居	145人 43.9%	136人 41.2%	49人 14.8%	330人 100.0%
	600人 54.2%	378人 34.1%	130人 11.7%	1108人 100.0%
合計	1500人 48.2%	1178人 37.8%	437人 14.0%	3115人 100.0%

単一回答, 設問2については「ない・ある」の選択肢のなかから単一回答, 設問3については「不満である=1～満足している=5」, 設問4～6については「まったく感じていない=1～とても感じている=5」, 設問7～9については「まったく感じない=1～とても感じる=5」の5段階の評定尺度評価とした。

3.3. 分析対象者の選定

男性独居は798名(回答率37.6%), 男性同居は1305名(回答率25.4%), 女性独居は390名(回答率39.4%), 女性同居は1305名(回答率44.9%)の合計3798名から回答が得られた。これらの回答者のなかで、「設問1:介護認定」で「要支援1～2, あるいは要介護1～5, 認定申請中, 認定されているが要介護度は不明」を回答した者と、「設問2:健康上の問題による日常生活の影響」で「ある」を回答した者(男性独居は195名, 男性同居は231名, 女性独居は60名, 女性同居は197名の合計683名)は, 本研究の調査対象としている「元気な高齢者」に該当しないと判断して, 以降の分析の対象から除くことにした。

以上から, 分析対象とした回答者3115名の基本属性ごとの年齢別にみた内訳を表1, 都市規模別にみた内訳を表2に示す。

4. 日常生活の満足度

4.1. 分析の方法

「設問3:日常生活の満足度」に対する回答結果をもとに, 合計および基本属性別の平均値を算出し, 一元配置分散分析によるF検定を行った。また, 基本属性別の集団としての特徴を把握するため, 回答人数をもとに χ^2 検定・残差分析[注14, 15]を行い, 基本属性間の有意差について分析した。さらに, 4つの基本属性ごとの年齢別, 都市規模別にみた集団としての特徴を把握するため, 回答人数をもとに同様の分析を行い, 4つの基本属性ごとの年齢間, 都市規模間の有意差について分析した。

4.2. 基本属性と日常生活の満足度との関係

(1) 基本属性別の比較 回答結果の平均値を表3に示す。有意水準1%のもと基本属性間に有意な差がみられた($F(3, 3111)=35.927, p < 0.01$)。全体の平均値は「3.84」で, 男性独居は「3.53」, 男性同居は「3.95」, 女性独居は「3.90」, 女性同居は「3.89」である。男性独居の平均値がもっとも低く, 他3基本属性ではあまり大きな違いはみられなかった。

次に基本属性別の χ^2 検定の結果を表4に示す。有意水準1%のもと帰無仮説は棄却され, 基本属性間に有意な差がみられた($\chi^2(12, N=3115)=120.136, p < 0.01$)。具体的には, 男性独居の「どちらともいえない」, 「やや不満である」, 「不満である」, 男性同居の「満足している」, 女性同居の「まあ満足し

表2 調査対象とした回答者の都市規模別にみた内訳

	町村	小都市	中都市	大都市	合計
男性 独居	16人 2.7%	54人 9.0%	151人 25.0%	382人 63.3%	603人 100.0%
	60人 5.6%	133人 12.4%	408人 38.0%	473人 44.0%	1074人 100.0%
女性 独居	5人 1.5%	19人 5.8%	78人 23.6%	228人 69.1%	330人 100.0%
	30人 2.7%	101人 9.1%	352人 31.8%	625人 56.4%	1108人 100.0%
合計	111人 3.6%	307人 9.9%	989人 31.7%	1708人 54.8%	3115人 100.0%

ている」は, 1%水準において期待値より有意に多い。反対に, 男性独居の「まあ満足している」, 「満足している」, 男性同居の「不満である」は, 1%水準において期待値より有意に少ない。男性同居および女性同居の「どちらともいえない」は5%水準において期待値より有意に少ない。

(2) 基本属性ごとの年齢別および都市規模別の比較 χ^2 検定の結果を表5に示す。年齢別では, 男性独居, 男性同居, 女性独居において有意水準1%のもと帰無仮説は棄却されず, 有意な差はみられなかった。一方, 女性同居のみ有意水準1%のもと帰無仮説は棄却され, 年齢間で有意な差がみられた($\chi^2(8, N=1108)=23.932, p < 0.01$)。具体的には, 表6に示すとおり60～64歳の「やや不満である」, 65～69歳の「まあ満足している」は1%水準において期待値より有意に多い。60～64歳の「どちらともいえない」, 70～74歳の「満足している」は5%水準において, 期待値より有意に多い。反対に, 60～64歳の「まあ満足している」は1%水準において期待値より有意に少ない。65～69歳の「やや不満である」, 70～74歳の「どちらともいえない」は5%水準において期待値より有意に少ない。

都市規模別では, 4基本属性の何れにおいても, 有意水準1%のもと帰無仮説は棄却されず, 有意な差はみられなかった。

4.3. まとめ

基本属性別の比較では, 男性独居の平均値が他3基本属性と比較して低いことがわかった。

4基本属性の集団としての特徴をみると, 男性では世帯構造の違いにより反対の傾向がみられた。一方, 女性では独居世帯に特徴はみられなかったが, 同居世帯では満足している者の割合が高い傾向にあることがわかった。このことから, 日常生活の満足度は, 性別を問わず世帯構造の違いが影響していることが示唆された。

基本属性ごとの年齢別, 都市規模別での比較では, 前者において女性の同居世帯のみ影響が示唆された。一方, 後者は影響していないことがわかった。

表3 日常生活の満足度の平均値

(F(3,3111)=35.927, p<0.01)				
	満足度	人数	標準偏差	
男性	独居	3.53	603	1.0086
	同居	3.95	1074	0.7704
女性	独居	3.90	330	0.8157
	同居	3.89	1108	0.8064
全体		3.84	3115	0.8526

表4 日常生活の満足度の χ^2 検定の結果と調整済み残差

$\chi^2(12, N=3115) = 120.136 \quad p < 0.01$

		とても満足している	まあ満足している	どちらともいえない	やや不満である	とても不満である
男性	独居	37	45	160	286	75
	調整済み残差	6.45	4.32	6.12	-5.50	-3.92
同居	独居	11	37	172	633	221
	調整済み残差	-3.77	-1.65	-2.04	1.29	2.78
女性	独居	6	14	49	198	63
	調整済み残差	-0.81	-0.03	-1.55	1.02	0.57
同居	独居	23	37	178	670	200
	調整済み残差	-1.06	-1.91	-2.03	2.60	0.11

表5 日常生活の満足度の基本属性ごとの年齢別と都市規模別 χ^2 検定の結果

		年齢	都市規模
男性	独居	$\chi^2(8, N=603) = 12.247, n.s.$	$\chi^2(12, N=603) = 5.289, n.s.$
	同居	$\chi^2(8, N=1074) = 9.394, n.s.$	$\chi^2(12, N=1074) = 11.750, n.s.$
女性	独居	$\chi^2(8, N=330) = 6.684, n.s.$	$\chi^2(12, N=330) = 6.189, n.s.$
	同居	$\chi^2(8, N=1108) = 23.932, P < 0.01$	$\chi^2(12, N=1108) = 11.969, n.s.$

表6 日常生活の満足度の女性同居の年齢別にみた χ^2 検定の結果および調整済み残差

$\chi^2(8, N=1108) = 23.932 \quad p < 0.01$

		とても満足している	まあ満足している	どちらともいえない	やや不満である	とても不満である
女性	同居	16	28	110	339	107
	調整済み残差	1.50	2.67	2.23	-2.94	-0.20
60~64歳	独居	6	7	56	249	60
	調整済み残差	-0.82	-1.98	-0.82	2.65	-1.36
65~69歳	独居	1	2	12	82	33
	調整済み残差	-1.11	-1.22	-2.26	0.65	2.31

5. 日常生活の3種類の生活意識

5.1. 分析の方法

「設問4: 日常生活の楽しさ」、「設問5: 日常生活の不安」、「設問6: 日常生活の生きがい」に対する評定尺度の回答結果をもとに、合計および基本属性別に平均値を算出し、一元配置分散分析によるF検定を行った。また、基本属性ごとの集団としての特徴を把握するため、回答人数をもとに χ^2 検定・残差分析[注14, 15]を行い、基本属性間の有意差について分析した。さらに4つの基本属性ごとの年齢別、都市規模別の集団としての特徴を把握するため、回答人数をもとに同様の分析を行い、4つの基本属性ごとの年齢間、都市規模間の有意差について分析した。

5.2. 基本属性と日常生活の楽しさの関係

(1) 基本属性別の比較 基本属性別の回答結果の平均値を表7の左端に示す。有意水準1%のもと基本属性間に有意な差がみられた(F(3,3111)=31.148, p < 0.01)。全体の平均値は「3.74」で、男性独居は「3.44」、男性同居は「3.78」、女性独居は「3.84」、女性同居は「3.83」である。男性独居の平均値がもっとも低く、

表7 日常生活の楽しさ、日常生活の不安、日常生活の生きがいの平均値

(F(3,3111)=31.148, p<0.01)				(F(3,3111)=14.181, p<0.01)			(F(3,3111)=25.568, p<0.01)		
	楽しさ	不安	生きがい	平均値	人数	標準偏差	平均値	人数	標準偏差
男性	独居	3.44	3.06	3.21	603	1.0189	3.21	603	0.9666
	同居	3.78	2.88	3.55	1074	0.9854	3.55	1074	0.8571
女性	独居	3.84	3.25	3.55	330	1.0212	3.55	330	0.8955
	同居	3.83	3.08	3.57	1108	0.9871	3.57	1108	0.8748
全体		3.74	3.03	3.49	3115	1.0027	3.49	3115	0.9000

他3基本属性については、あまり大きな違いがみられなかった。

次に基本属性別の χ^2 検定の結果を表8に示す。有意水準1%のもと帰無仮説は棄却され、基本属性間に有意な差がみられた($\chi^2(12, N=3115) = 110.442 \quad p < 0.01$)。具体的には、男性独居の「まったく感じていない」、「あまり感じていない」、「どちらともいえない」、女性同居の「多少感じている」が1%水準、女性独居の「とても感じている」が5%水準において期待値より有意に多い。反対に男性独居の「多少感じている」、「とても感じている」、男性同居の「あまり感じていない」、女性同居の「どちらともいえない」が1%水準、同居女性の「あまり感じていない」が5%水準において期待値より有意に少ない。

以上のように、男性では世帯構造の違いにより反対の傾向がみられた。一方、女性では世帯構造に関わらず類似した傾向がみられた。このことから、日常生活の楽しさの評価は、性別で異なるとともに、男性では世帯構造の違いが影響していることが示唆された。

(2) 基本属性ごとの年齢別および都市規模別の比較 χ^2 検定の結果を表9に示す。年齢別では、男性独居と男性同居では、有意水準1%のもと帰無仮説は棄却されず、有意な差はみられなかった。一方、女性独居と女性同居では有意水準1%のもと帰無仮説は棄却され、有意な差がみられた。具体的には、独居女性では表10上段に示すとおり、65~69歳および70~74歳の「とても感じている」が5%水準において期待値より有意に多い。反対に60~64歳の「とても感じている」、65~69歳の「どちらともいえない」が1%水準、70~74歳の「多少感じている」が5%水準において期待値より有意に少ない。同居女性では表10下段に示すとおり65~69歳の「まあ満足している」は1%水準、60~64歳の「どちらともいえない」、70~74歳の「満足している」は5%水準において期待値より有意に多い。反対に60~64歳の「まあ満足している」、65~69歳の「やや不満である」、70~74歳の「どちらともいえない」は、5%水準において期待値より少ない。

都市規模別では男性独居、男性同居、女性独居、女性同居の何れにおいても、有意水準1%のもと帰無仮説は棄却されず、有意な差はみられなかった。

以上のように、日常生活の楽しさの評価は、年齢別では女性独居と女性同居において有意な差があり、女性において年齢が影響していることが示唆された。一方、都市規模は影響していないことがわかった。

5.3. 基本属性と日常生活の不安の関係

(1) 基本属性別の比較 基本属性別の回答結果の平均値を表7の中央に示す。有意水準1%のもと基本属性間に有意な差がみ

表 8 日常生活の楽しさの χ^2 検定の結果および調整済み残差

χ^2 (12, N=3115) = 110.442 p < 0.01

		まったく感じていない	あまり感じていない	どちらともいえない	多少感じている	とても感じている
男性 独居	度数	12	97	178	247	69
	調整済み残差	3.31	6.87	4.59	-5.53	-3.81
同居	度数	7	71	254	565	177
	調整済み残差	-0.94	-3.29	1.11	1.24	-0.16
女性 独居	度数	1	29	62	168	70
	調整済み残差	-1.17	-0.09	-1.71	-0.06	2.36
同居	度数	7	81	207	611	202
	調整済み残差	-1.05	-2.35	-3.80	3.38	1.78

表 9 日常生活の楽しさの基本属性ごとの年齢別と都市規模別に見た χ^2 検定の結果

	年齢	都市規模
男性 独居	χ^2 (8, N=603) = 13.045, n.s.	χ^2 (12, N=603) = 5.959, n.s.
	χ^2 (8, N=1074) = 9.519, n.s.	χ^2 (12, N=1074) = 13.882, n.s.
女性 独居	χ^2 (8, N=330) = 24.651, P < 0.01	χ^2 (12, N=330) = 9.317, n.s.
	χ^2 (8, N=1108) = 24.978, P < 0.01	χ^2 (12, N=1108) = 15.944, n.s.

表 10 日常生活の楽しさの独居女性および同居女性の年齢別にみた χ^2 検定の結果および調整済み残差

女性独居: χ^2 (8, N=330) = 24.651 p < 0.01
 女性同居: χ^2 (8, N=1108) = 24.978 p < 0.01

		まったく感じていない	あまり感じていない	どちらともいえない	多少感じている	とても感じている	
女性 独居 年齢	60~64歳 度数	1	17	33	77	17	
	調整済み残差	1.13	1.67	1.63	0.71	-3.73	
	65~69歳 度数	0	9	16	74	37	
	調整済み残差	-0.84	-1.17	-2.73	1.07	2.23	
70~74歳	度数	0	3	13	17	16	
	調整済み残差	-0.42	-0.71	1.50	-2.46	2.12	
	同居 年齢	60~64歳 度数	5	56	130	315	94
		調整済み残差	0.92	2.81	2.77	-1.92	-2.40
65~69歳	度数	2	19	60	224	73	
	調整済み残差	-0.31	-2.10	-1.73	1.98	0.67	
70~74歳	度数	0	6	17	72	35	
	調整済み残差	-0.97	-1.26	-1.75	0.06	2.73	

られた ($F(3, 3111) = 14.181, p < 0.01$)。全体の平均値は「3.03」で、男性独居は「3.06」、男性同居は「2.88」、女性独居は「3.25」、女性同居は「3.08」である。女性独居の平均値がもっとも高く、男性独居と女性同居の平均値はほぼ拮抗しており、男性同居の平均値が最も低い。

次に基本属性別の χ^2 検定の結果を表 11 に示す。有意水準 1% のもと帰無仮説は棄却され、基本属性間に有意な差がみられた ($\chi^2(12, N=3115) = 52.980, p < 0.01$)。具体的には、男性同居の「あまり感じていない」、女性同居の「多少感じている」が 1% 水準、同居男性の「まったく感じていない」、同居女性の「多少感じている」が 5% 水準において、期待値より有意に多い。反対に、同居男性の「多少感じている」、「とても感じている」、女性独居の「あまり感じていない」、「どちらともいえない」、女性同居の「まったく感じていない」は 5% 水準において期待値より有意に低い。

以上のように、男性では独居世帯に特徴はみられなかったが、同居世帯では不安を感じている者の割合が低い傾向にあることがわかった。一方、女性では世帯構造を問わず、不安を感じている者の割合が高い傾向にあることがわかった。このことから、日常生活の不安の評価は、性別で異なるとともに、男性では世帯構造の違いが影響していることが示唆された。

表 11 日常生活の不安の χ^2 検定の結果および調整済み残差

χ^2 (12, N=3115) = 52.980 p < 0.01

		まったく感じていない	あまり感じていない	どちらともいえない	多少感じている	とても感じている
男性 独居	度数	24	182	174	181	42
	調整済み残差	0.52	-1.33	0.92	-0.51	1.52
同居	度数	51	394	305	279	45
	調整済み残差	2.43	3.66	0.95	-4.30	-2.61
女性 独居	度数	9	88	72	135	26
	調整済み残差	-0.93	-2.38	-2.38	4.17	1.82
同居	度数	29	347	301	367	64
	調整済み残差	-2.24	-1.01	-0.17	2.01	0.17

表 12 日常生活の不安の基本属性ごとの年齢別および都市規模別にみた χ^2 検定の結果

	年齢	都市規模
男性 独居	χ^2 (8, N=603) = 18.635, n.s.	χ^2 (12, N=603) = 10.239, n.s.
	χ^2 (8, N=1074) = 6.786, n.s.	χ^2 (12, N=1074) = 10.755, n.s.
女性 独居	χ^2 (8, N=330) = 14.838, n.s.	χ^2 (12, N=330) = 16.939, n.s.
	χ^2 (8, N=1108) = 11.159, n.s.	χ^2 (12, N=1108) = 10.391, n.s.

(2) 基本属性ごとの年齢別および都市規模別での比較 χ^2 検定の結果を表 12 に示す。年齢別、都市規模別において、4 基本属性において、有意水準 1% のもと帰無仮説は棄却されず、年齢間、都市規模間に有意な差はみられなかった。

以上のように、日常生活の不安の評価は、年齢、都市規模は影響していないことがわかった。

5.4. 基本属性と日常生活の生きがいの関係

(1) 基本属性別での比較 回答結果の平均値を表 6 の右端に示す。有意水準 1% のもと基本属性間に有意な差がみられた ($F(3, 3111) = 25.568, p < 0.01$)。全体の平均値は「3.49」で、独居男性は「3.21」、独居女性は「3.55」、同居男性は「3.55」、同居女性は「3.57」である。独居男性の平均値がもっとも低く、他 3 基本属性については、あまり大きな違いがみられなかった。

次に基本属性別の χ^2 検定の結果を表 13 に示す。有意水準 1% のもと帰無仮説は棄却され、基本属性間に有意な差がみられた ($\chi^2(12, N=3115) = 106.427, p < 0.01$)。具体的には男性独居の「まったく感じていない」、「あまり感じていない」、「どちらともいえない」、女性同居の「多少感じている」が 1% 水準、男性同居の「どちらともいえない」が 5% 水準において期待値より有意に多い。反対に、男性独居の「多少感じている」、男性同居の「あまり感じていない」、女性同居の「どちらともいえない」が 1% 水準、女性独居の「どちらともいえない」、女性同居の「あまり感じていない」が 5% 水準において期待値より有意に低い。

以上のように、男性では世帯構造の違いにより反対の傾向がみられた。一方、女性では世帯構造に関わらず類似した傾向がみられた。このことから、日常生活の生きがいの評価は、性別で異なるとともに、男性では世帯構造の違いが影響していることが示唆された。

(2) 基本属性ごとの年齢別および都市規模別での比較 χ^2 検定の結果を表 14 に示す。年齢別においては、男性同居と女性独居、都市規模別においては 4 基本属性において、有意水準 1% のもと帰無仮説は棄却されず、有意な差はみられなかった。一方、年齢別においては、男性独居と女性同居において、有意水

表 13 日常生活の生きがいの χ^2 検定の結果および調整済み残差

χ^2 (12, N=3115) =106.427 p<0.01

		まったく感じていない	あまり感じていない	どちらともいえない	多少感じる	とても感じる
男性 独居	度数	23	111	240	177	52
	調整済み残差	3.85	6.35	3.14	-6.71	-2.24
同居	度数	15	87	397	446	129
	調整済み残差	-1.48	-3.87	2.23	0.07	1.04
女性 独居	度数	3	43	94	151	39
	調整済み残差	-1.39	1.18	-2.37	1.68	0.37
同居	度数	18	105	339	517	129
	調整済み残差	-0.82	-2.15	-3.28	4.39	0.58

表 14 日常生活の生きがいの基本属性ごとの年齢別および都市規模別にみた χ^2 検定の結果

	年齢	都市規模
男性 独居	χ^2 (8, N=603) =21.193, P<0.01	χ^2 (12, N=603) =12.008, n.s.
	χ^2 (8, N=1074) =10.263, n.s.	χ^2 (12, N=1074) =14.215, n.s.
女性 独居	χ^2 (8, N=330) =16.940, n.s.	χ^2 (12, N=330) =5.993, n.s.
	χ^2 (8, N=1108) =28.670, P<0.01	χ^2 (12, N=1108) =7.714, n.s.

表 15 日常生活の生きがいの男性独居および女性同居の年齢別にみた χ^2 検定の結果および調整済み残差

男性独居: χ^2 (8, N=603) =21.193 p<0.01
女性同居: χ^2 (8, N=1108) =28.670 p<0.01

		まったく感じていない	あまり感じていない	どちらともいえない	多少感じる	とても感じる
男性 独居	年齢 60~64歳	14	52	135	76	15
	調整済み残差	1.22	-0.37	3.13	-1.74	-2.96
	年齢 65~69歳	9	43	74	78	28
	調整済み残差	0.07	0.06	-3.14	1.82	2.38
	年齢 70~74歳	0	16	31	23	9
	調整済み残差	-1.90	0.45	-0.11	-0.05	0.94
女性 同居	年齢 60~64歳	16	61	204	266	53
	調整済み残差	2.98	0.85	2.67	-1.69	-3.17
	年齢 65~69歳	2	35	106	183	52
	調整済み残差	-2.08	-0.18	-1.33	0.84	1.58
	年齢 70~74歳	0	9	29	68	24
	調整済み残差	-1.56	-1.06	-2.18	1.37	2.58

準1%のもと帰無仮説は棄却され、有意な差がみられた。具体的には、男性独居においては表15上段に示すとおり60~64歳の「どちらともいえない」が1%水準、65~69歳の「とても感じている」が5%水準で期待値より有意に多く、60~64歳の「とても感じている」、65~69歳の「どちらともいえない」が1%水準で有意に低い。女性同居では、表15下段に示すとおり60~64歳の「まったく感じていない」、「どちらともいえない」、70~74歳の「とても感じている」が5%水準で有意に多く、60~64歳の「とても感じている」、65~69歳の「まったく感じていない」、70~74歳の「どちらともいえない」が5%水準において期待値より有意に低い。

以上のように、日常生活の生きがいの評価は、年齢別では男性独居と女性同居において年齢が影響していることが示唆された。一方、都市規模は影響していないことがわかった。

5.5. まとめ

(1) 基本属性別の特徴 日常生活の楽しさ、日常生活の生きがいにおいて、男性独居の平均値が他3基本属性と比較して低いことがわかった。また、日常生活の不安において、女性独居の平均値が他3属性と比較して高いことがわかった。

4基本属性の集団としての特徴をみると、3種類の生活意識

に共通して、男性では、世帯構造の違いが評価に影響していることが示唆された。一方、女性では世帯構造の違いに関わらず、共通した傾向があることが示唆された。

(2) 基本属性ごとの年齢別および都市規模別の特徴 年齢は、日常生活の楽しさにおける女性同居、日常生活の生きがいにおける男性独居、女性同居において影響が示唆されたが、日常生活の不安においては影響しておらず、生活意識の種類、性別、世帯構造の違いにより影響の有無が示唆された。一方、都市規模は、3種類の生活意識の評価に影響していないことがわかった。

6. 3種類の生活意識の因子とクラスター

5章で検討した日常生活の楽しさ、日常生活の不安、日常生活の生きがいの評価に影響すると考えられる具体的な日常生活の活動、懸念事項、生活シーンについて考察する。

6.1. 分析の方法

「設問7：楽しさを感じる活動(29種類)」、「設問8：不安を感じる懸念事項(16種類)」、「設問9：生きがいを感じる生活シーン(13種類)」に対する3115名のそれぞれの回答結果(「まったく感じない=1~とても感じる=5」の5段階の評定尺度評価)をもとに、因子分析(主因子法。固有値1以上の値についてバリマックス回転)を行った[注14]。

また、算出された因子得点をもとにWard法によるクラスター分析[注14]を行い、クラスターを分類するとともに、各クラスターに分類された調査対象者の因子得点の平均値から各クラスターの特徴を把握した。

6.2. 因子の解釈とクラスターの抽出

(1) 日常生活の楽しさの因子とクラスター 因子分析の結果、因子負荷量が1つの因子に対して0.4未満の9種類の行動を除く20種類の行動を選出した。その結果、4因子が抽出された(表16)。累積寄与率は低めであるが、4因子が複数の行動から構成されるとともに、それぞれの因子の解釈も可能であり、分析の結果は妥当であると判断した。

第1因子は「社会奉仕、ボランティア活動」、「教養講座の受講などの学習活動」、「教育活動(自分が教える立場)」などの因子負荷量の値が大きいことから「社会交流因子」、第2因子は「食事、飲食」、「買い物、ウィンドウショッピング」、「テレビ、ラジオ」などの因子負荷量の値が大きいことから「日常生活因子」、第3因子は「ハイキング・登山・キャンプ・釣りなどの自然の中で行うアウトドアレジャー」、「散歩、ウォーキング、ジョギング」の因子負荷量の値が大きいことから「屋外活動因子」、第4因子は「競馬やパチンコなどの賭け事をする事」、「タバコを吸うこと」の因子負荷量の値が大きいことから「嗜好活動因子」として解釈することにした。

表 16 日常生活の楽しさを感じる活動の因子負荷量

	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子
22 社会奉仕、ボランティア活動	0.690	0.091	0.184	0.005
23 教養講座の受講などの学習活動	0.686	0.153	0.142	-0.068
29 教育活動（自分が教える立場）	0.664	0.061	0.121	0.111
28 伝統文化の維持・保存	0.641	0.199	0.182	0.006
3 若い世代と交流すること	0.582	0.312	0.182	-0.001
12 主に室内で行う趣味活動（絵画、書道、手芸、裁縫、工芸、陶芸など）	0.478	0.263	0.142	-0.118
18 歌、踊り（カラオケ、民謡、コーラス、楽器演奏、社交ダンスなど）	0.464	0.196	0.126	0.133
27 宗教活動、信仰	0.448	-0.030	-0.018	0.201
20 仕事（職業、家業）	0.415	0.165	0.090	0.097
5 食事、飲食	0.129	0.672	0.128	-0.043
10 買物、ウインドウショッピング	0.195	0.600	0.065	-0.083
1 テレビ、ラジオ	0.006	0.560	0.026	0.030
21 ワークプロ、パソコン、インターネット、携帯電話	0.099	0.488	0.026	0.063
2 仲間と集まったり、おしゃべりをしたりすることや親しい友人、同じ趣味の人との交際	0.390	0.479	0.189	-0.113
9 旅行	0.186	0.472	0.379	-0.123
15 スポーツ観戦、観劇、音楽会、映画	0.303	0.463	0.225	-0.051
24 ハイキング・登山・キャンプ・釣りなど自然の中で行うアウトドアレジャー	0.336	0.120	0.712	0.070
8 散歩、ウォーキング、ジョギング	0.273	0.312	0.439	-0.045
26 競馬やパチンコなどの賭け事をする事	0.123	-0.019	0.076	0.534
7 タバコを吸うこと	0.018	-0.031	-0.069	0.498
固有値	3.501	2.452	1.142	0.682
分散の%	17.504	12.261	5.708	3.411
累積%	17.504	29.765	35.474	38.885

表 17 日常生活の楽しさを感じる活動の4クラスタの因子得点の平均値

	第1因子 社会交流 因子	第2因子 日常生活 因子	第3因子 屋外活動 因子	第4因子 嗜好活動 因子
クラスタ1 交流享楽型	1180 37.9%	0.55721	0.00714	0.17617
クラスタ4 日常享楽型	728 23.4%	-0.75139	0.56390	0.04080
クラスタ2 嗜好享楽型	773 24.8%	0.31813	0.05248	0.06411
クラスタ3 非享楽型	434 13.9%	-0.82120	-1.05879	-0.66161

クラスタ分析の結果、4つのクラスタに分類することができた（表 17）。抽出された因子の順番に因子得点の平均値が正の値を持つクラスタから順番にみていく。「クラスタ1」は1180名（37.9%）で構成されており、もっとも人数が多い。クラスタの特徴としては、第1因子の因子得点が正に大きいことから社会と交流する活動に楽しさを見出している「交流享楽型」と考えられる。「クラスタ4」は728名（23.4%）で構成されている。クラスタの特徴としては、第2因子の因子得点が正に大きいことから日常生活の活動に楽しさを感じている「日常享楽型」と考えられる。「クラスタ2」は773名（24.8%）で構成されている。クラスタの特徴としては、第4因子の因子得点が正に大きいことから嗜好活動から楽しさを感じている「嗜好享楽型」と考えられる。「クラスタ3」は434名（13.9%）で構成されており、もっとも人数が少ない。クラスタの特徴としては、第1因子～第4因子のすべての因子得点が負であることから日常生活の活動から楽しさを見出していない「非享楽型」と考えられる。

(2) 日常生活の不安の因子とクラスタ 因子分析の結果、因子負荷量が1つの因子に対して0.4未満の1種類の懸念事項を除く12種類の懸念事項を選出した。その結果、2因子が抽出された（表 18）。累積寄与率は低めであるが、2因子が複数の懸念事項から構成されるとともに、それぞれの因子の解釈も可能であり、分析の結果は妥当であると判断した。

表 18 日常生活の不安を感じる懸念事項の因子負荷量

	第1因子	第2因子
1 健康や病気のこと	0.739	0.222
2 寝たきりや身体が不自由になり介護が必要な状態になること	0.733	0.261
3 病気などのとき、面倒をみてくれる人がいないこと	0.665	0.294
4 頼れる人がいなくなる事	0.596	0.419
5 生活のための収入のこと	0.539	0.244
16 自然災害（地震・洪水など）	0.490	0.335
7 住まいに関する事	0.460	0.391
13 新しい商品やサービスの活用方法がわからなくなる事	0.220	0.704
14 インターネット等の新しい情報入手方法が増え、情報収集が困難になる事	0.187	0.671
15 言葉、生活様式、人々の考えなどが大きく変わってしまう事	0.291	0.635
9 人（近隣、親戚、友人、仲間など）のつきあひのこと	0.352	0.553
12 だまされたり、犯罪に巻き込まれたりすること	0.376	0.550
8 家族との人間関係	0.291	0.515
11 社会の仕組み（法律、社会保障、金融制度）が大きく変わってしまう事	0.448	0.459
6 家業、家屋、土地・田畑などの財産や、先祖や自分のお墓の管理・相続のこと	0.298	0.457
固有値	3.433	3.344
分散の%	22.884	22.294
累積%	22.884	45.177

表 19 日常生活の不安を感じる懸念事項の3クラスタの因子得点の平均値

	第1因子 自己懸念 因子	第2因子 社会懸念 因子
クラスタ1 複合不安型	1422 45.7%	0.52470
クラスタ3 自己不安型	400 12.8%	0.76541
クラスタ2 非不安型	1293 41.5%	-0.81383

第1因子は「健康や病気のこと」、「寝たきりや身体が不自由になり介護が必要な状態になること」、「病気などのとき、面倒をみてくれる人がいないこと」などの因子負荷量の値が大きいことから「自己懸念因子」、第2因子は「新しい商品やサービスの活用方法がわからなくなること」、「インターネット等の新しい情報入手方法が増え、情報収集が困難になること」、「言葉、生活様式、人々の考えなどが大きく変わってしまうこと」などの因子負荷量の値が大きいことから「社会懸念因子」として解釈することにした。

クラスタ分析の結果、3つのクラスタに分類することができた（表 19）。抽出された因子の順番に因子得点の平均値が正の値を持つクラスタから順番にみていく。「クラスタ1」は1422名（45.7%）で構成されており、もっとも人数が多い。クラスタの特徴としては、第1因子、第2因子ともに因子得点が正に大きいことから自己および社会の両方に不安を感じている「複合不安型」と考えられる。「クラスタ3」は400名（12.8%）で構成されており、もっとも人数が少ない。クラスタの特徴としては、第1因子の因子得点が正に大きいことから自己に対して不安を感じている「自己不安型」と考えられる。「クラスタ2」は1293名（41.5%）で構成されており、2番目に人数が多い。クラスタの特徴としては、第1因子、第2因子ともに因子得点が負に大きいことから不安を感じていない「非不安型」と考えられる。

(3) 日常生活の生きがいの因子とクラスタ 因子分析の結果、3因子が抽出された（表 20）。累積寄与率は低めであるが、3因子が複数の生活シーンから構成されるとともに、それぞれの

表 20 日常生活の生きがいを感じる生活シーンの因子負荷量

	第1因子	第2因子	第3因子
12 おいしい物を食べているとき	0.761	0.129	0.149
9 旅行に行っているとき	0.580	0.177	0.259
11 収入があったとき	0.556	0.265	-0.024
7 友人や知人と食事、雑談しているとき	0.542	0.396	0.187
4 テレビを見たり、ラジオを聞いているとき	0.517	0.121	0.110
3 趣味やスポーツに熱中しているとき	0.451	0.372	0.110
8 社会奉仕や地域活動をしているとき	0.062	0.674	0.277
2 勉強や教養などに身を入れているとき	0.297	0.610	0.102
13 若い世代と交流しているとき	0.238	0.600	0.278
1 仕事に打ち込んでいるとき	0.208	0.542	0.078
10 他人から感謝されたとき	0.485	0.518	0.141
5 孫の面倒をみているとき	0.068	0.197	0.683
6 家族との団らんのとき	0.357	0.222	0.591
固有値	2.549	2.263	1.155
分散の%	19.606	17.410	8.884
累積%	19.606	37.017	45.901

表 21 日常生活の生きがいを感じる生活シーンの3クラスターの因子得点の平均値

	第1因子 自己満足 因子	第2因子 社会交流 因子	第3因子 家族団らん 因子
クラスター3 複合生きがい型	1188 38.1%	0.40375	0.29562
クラスター1 自己生きがい型	1134 36.4%	0.35434	-0.20640
クラスター2 非生きがい型	793 25.5%	-1.11157	-0.08942

因子の解釈も可能であり、分析の結果は妥当であると判断した。

第1因子は「おいしい物を食べているとき」、「旅行に行っているとき」、「収入があったとき」などの因子負荷量の値が大きいため「自己満足因子」、第2因子は「社会奉仕や地域活動をしているとき」、「勉強や教養などに身を入れているとき」、「若い世代と交流しているとき」などの因子負荷量の値が大きいため「社会交流因子」、第3因子は「孫の面倒をみているとき」、「家族との団らんのとき」の因子負荷量の値が大きいため「家族団らん因子」として解釈することにした。

クラスター分析の結果、3つのクラスターに分類することができた(表21)。抽出された因子の順番に因子得点の平均値が正の値を持つクラスターから順番にみていく。「クラスター3」は1188名(38.1%)で構成されており、もっとも人数が多い。クラスターの特徴としては、第1因子、第2因子、第3因子の全ての因子得点が正に大きいことから自己、社会、家族とのすべての生活シーンに対して生きがいを感じている「複合生きがい型」と考えられる。「クラスター1」は1134名(36.4%)で構成されており、前述した「クラスター3：複合生きがい型」とほぼ同様の人数である。クラスターの特徴としては、第1因子のみ因子得点が正に大きいことから自分自身の満足に生きがいを感じている「自己生きがい型」と考えられる。「クラスター2」は793名(25.5%)で構成されており、もっとも人数は少ない。クラスターの特徴としては、第1因子、第2因子、第3因子の全ての因子得点が負に大きいことから、生活シーンに対して生きがいを見出していない「非生きがい型」と考えられる。

7. 基本属性と生活意識のクラスターの関係

7.1. 分析の方法

6章で抽出した日常生活の楽しさを感じる活動、日常生活の不安を感じる懸念事項、日常生活の生きがいを感じる生活シーンから抽出されたクラスターをもとに、基本属性別の集団として

表 22 日常生活の楽しさを感じる活動の χ^2 検定の結果および調整済み残差

$\chi^2(9, N=3115) = 216.712, p < 0.01$

		クラスター3 非享楽型	クラスター2 嗜好享楽型	クラスター4 日常享楽型	クラスター1 交流享楽型
男性 独居	度数	131	210	96	166
	調整済み残差	6.15	6.34	-4.81	-5.84
同居	度数	149	334	188	403
	調整済み残差	-0.07	5.89	-5.61	-0.30
女性 独居	度数	40	60	99	131
	調整済み残差	-1.00	-2.95	3.01	0.72
同居	度数	114	169	345	480
	調整済み残差	-4.36	-9.18	7.61	4.65

表 23 日常生活の楽しさを感じる活動の基本属性ごとの年齢および都市規模別の χ^2 検定の結果

	年齢	都市規模
男性 独居	$\chi^2(6, N=603) = 2.273, n.s.$	$\chi^2(9, N=603) = 11.997, n.s.$
	同居	$\chi^2(6, N=1074) = 14.863, n.s.$
女性 独居	$\chi^2(6, N=330) = 4.317, n.s.$	$\chi^2(9, N=330) = 6.242, n.s.$
	同居	$\chi^2(6, N=1108) = 5.827, n.s.$

の特徴を把握するため、それぞれの生活意識においてクラスターごとの該当人数をもとに χ^2 検定・残差分析を行った[注14, 15]。さらに基本属性ごとに、年齢別、都市規模別に抽出されたクラスターごとの該当人数をもとに同様の分析を行い、年齢間、都市規模間の有意差について分析した。

7.2. 基本属性と楽しさのクラスターの関係

(1) 基本属性別での比較 χ^2 検定の結果を表22に示す。有意水準1%のもと帰無仮説は棄却され、基本属性間に有意な差がみられた($\chi^2(9, N=3115) = 216.712, p < 0.01$)。具体的には男性独居の「クラスター3：非享楽型」、男性独居と男性同居の「クラスター2：嗜好享楽型」、女性独居と女性同居の「クラスター4：日常享楽型」、女性同居の「クラスター1：交流享楽型」が1%水準において期待値より有意に多い。反対に、男性独居の「クラスター1：交流享楽型」、男性独居と男性同居の「クラスター4：日常享楽型」、女性独居と女性同居の「クラスター2：嗜好享楽型」、女性独居の「クラスター3：非享楽型」が1%水準において、期待値より有意に低い。

以上のように、日常生活の楽しさのクラスターのありようは、「クラスター2：嗜好享楽型」、「クラスター4：日常享楽型」では性別、「クラスター1：交流享楽型」、「クラスター3：非享楽型」では性別に加えて世帯構造の違いが影響していることが示唆された。

(2) 基本属性ごとの年齢別および都市規模別での比較 χ^2 検定の結果を表23に示す。全ての基本属性において、年齢別、都市規模別において有意水準1%のもと帰無仮説は棄却されず、年齢間、都市規模間で有意な差はみられなかった。

以上のように、日常生活の楽しさのクラスターのありようは、年齢、都市規模は、影響していないことがわかった。

7.3. 基本属性と不安のクラスターの関係

(1) 基本属性別での比較 χ^2 検定の結果を表24に示す。有意水準1%のもと帰無仮説は棄却され、基本属性間に有意な差がみられた($\chi^2(6, N=3115) = 66.743, p < 0.01$)。具体的には、男性独居の「クラスター3：自己不安型」、男性同居の「クラスター2：非不安型」、女性独居と女性同居の「クラスター1：複合不安型」が1%水準において期待値より有意に多い。反対に、男性同居

表 24 日常生活の不安を感じる懸念事項の χ^2 検定の結果および調整済み残差

$\chi^2 (6, N=3115) = 66.743 \quad p < 0.01$

		クラスタ2 非不安型	クラスタ3 自己不安型	クラスタ1 複合不安型
男性 独居	度数	247	105	251
	調整済み残差	-0.30	3.74	-2.21
同居	度数	513	131	430
	調整済み残差	5.14	-0.78	-4.56
女性 独居	度数	97	56	177
	調整済み残差	-4.72	2.37	3.08
同居	度数	436	108	564
	調整済み残差	-1.82	-3.83	4.37

表 25 日常生活の不安を感じる懸念事項の基本属性ごとの年齢別および都市規模別にみた χ^2 検定の結果

		年齢	都市規模
男性 独居	$\chi^2 (4, N=603) = 3.200, n.s.$	$\chi^2 (6, N=603) = 2.923, n.s.$	
	$\chi^2 (4, N=1074) = 3.315, n.s.$	$\chi^2 (6, N=1074) = 10.538, n.s.$	
同居	$\chi^2 (4, N=330) = 2.137, n.s.$	$\chi^2 (6, N=330) = 2.385, n.s.$	
	$\chi^2 (4, N=1108) = 0.648, n.s.$	$\chi^2 (6, N=1108) = 3.515, n.s.$	

の「クラスタ1：複合不安型」、女性独居の「クラスタ2：非不安型」、女性同居の「クラスタ3：自己不安型」が1%水準において、男性独居の「クラスタ1：複合不安型」が5%水準において、期待値より有意に少ない。

以上のように、日常生活の不安のクラスタのありようは、「クラスタ1：複合不安型」では性別、「クラスタ3：自己不安型」では世帯構造、「クラスタ2：非不安型」では性別に加えて世帯構造の違いが影響していることが示唆された。

(2) 基本属性ごとの年齢別および都市規模別での比較 χ^2 検定の結果を表 25 に示す。年齢別、都市規模別で、すべての基本属性において有意水準1%のもと帰無仮説は棄却されず、年齢間、都市規模間で有意な差はみられなかった。

以上のように、日常生活の不安のクラスタのありようは、年齢、都市規模は、影響していないことがわかった。

7.4. 基本属性と生きがいのクラスタの関係

(1) 基本属性別での比較 χ^2 検定の結果を表 26 に示す。有意水準1%のもと帰無仮説は棄却され、基本属性間に有意な差がみられた ($\chi^2 (6, N=3115) = 299.093, p < 0.01$)。具体的には、男性独居では「クラスタ2：非生きがい型」と「クラスタ1：自己生きがい型」、男性同居では「クラスタ2：非生きがい型」、「クラスタ3：複合生きがい型」、女性独居では「クラスタ1：自己生きがい型」、女性同居では「」が1%水準において期待値より有意に多い。反対に男性独居では「クラスタ3：複合生きがい型」、男性同居では「クラスタ1：自己生きがい型」、女性独居では「クラスタ2」「クラスタ3」、女性同居では「」が1%水準において期待値より有意に少ない。

以上のように、生きがいのクラスタのありようは、「クラスタ3：非生きがい型」では性別、「クラスタ1：自己生きがい型」と「クラスタ3：複合生きがい型」では世帯構造の違いが影響していることが示唆された。

(2) 基本属性ごとの年齢別および都市規模別での比較 χ^2 検定の結果を表 27 に示す。年齢別では男性独居、男性同居、女性独居において有意水準1%のもと帰無仮説は棄却されず、有意な差はみられなかった。一方、女性同居のみ有意水準1%の

表 26 日常生活の生きがいを感じる生活シーンの χ^2 検定の結果および調整済み残差

$\chi^2 (6, N=3115) = 299.093 \quad p < 0.01$

		クラスタ2 非生きがい型	クラスタ1 自己生きがい型	クラスタ3 複合生きがい型
男性 独居	度数	216	293	94
	調整済み残差	6.51	6.93	-12.69
同居	度数	316	285	473
	調整済み残差	3.69	-8.30	4.92
女性 独居	度数	55	192	83
	調整済み残差	-3.88	8.70	-5.14
同居	度数	206	364	538
	調整済み残差	-6.54	-3.06	8.89

表 27 日常生活の生きがいを感じる生活シーンの基本属性ごとの年齢別および都市規模別にみた χ^2 検定の結果

		年齢	都市規模
男性 独居	$\chi^2 (4, N=603) = 5.685, n.s.$	$\chi^2 (6, N=603) = 7.054, n.s.$	
	$\chi^2 (4, N=1074) = 11.131, n.s.$	$\chi^2 (6, N=1074) = 11.739, n.s.$	
同居	$\chi^2 (4, N=330) = 1.578, n.s.$	$\chi^2 (6, N=330) = 14.041, n.s.$	
	$\chi^2 (4, N=1108) = 32.279, P < 0.01$	$\chi^2 (6, N=1108) = 13.552, n.s.$	

表 28 日常生活の生きがいを感じる生活シーンの女性同居における年齢別にみた χ^2 検定の結果

$\chi^2 (4, N=1108) = 32.279 \quad p < 0.01$

		クラスタ2 非生きがい型	クラスタ1 自己生きがい型	クラスタ3 複合生きがい型	
女性 同居	年齢 60~64歳	度数	136	218	246
		調整済み残差	3.79	2.68	-5.47
	65~69歳	度数	52	106	220
		調整済み残差	-2.98	-2.45	4.62
	70~74歳	度数	18	40	72
		調整済み残差	-1.48	-0.54	1.66

もと帰無仮説は棄却され、有意な差が見られた。具体的には、表 28 に示すとおり 60~64 歳の「クラスタ2：非生きがい型」、「クラスタ1：自己生きがい型」、65~69 歳の「クラスタ3：複合生きがい型」が1%水準において期待値より有意に高い。反対に 60~64 歳の「クラスタ3：複合生きがい型」、65~69 歳の「クラスタ2：非生きがい型」が1%水準、65~69 歳の「クラスタ1：自己生きがい型」が5%水準において期待値より有意に少ない。

都市規模別では4基本属性の何れにおいても有意水準1%のもと帰無仮説は棄却されず、有意な差はみられなかった。

以上のように、日常生活の生きがいのクラスタは、年齢別においては女性同居に対してのみ影響があることが示唆された。都市規模は影響していないことがわかった。

7.5. まとめ

(1) 基本属性別での比較 日常生活の楽しさを感じるクラスタの種類は性別、日常生活の不安を感じるクラスタの種類は性別と世帯構造、日常生活の生きがいを感じるクラスタの種類は世帯構造が影響していることが示唆された。反対に日常生活の楽しさ、日常生活の生きがいにおいて否定的なクラスタは性別が影響していることが示唆された。

(2) 基本属性ごとの年齢別および都市規模別での比較 年齢別においては、日常生活の生きがいにおいて、女性同居のみ影響していることが示唆された。一方、都市規模は影響していないことがわかった。

8. おわりに

本研究では、元気な高齢者を対象として、性別と世帯構造の組み合わせによる基本属性の違いに着目して、生活意識について検討した。

日常生活の満足度では、男性独居の平均値が他3基本属性と比較して低い。また、集団としての特徴をみると、性別を問わず世帯構造の違いが影響していることが示唆された。基本属性ごとの年齢別、都市規模別での比較では、後者の影響はみられないことがわかった。

3種類の生活意識では、日常生活の楽しさ、日常生活の生きがいにおいて男性独居の平均値が他3基本属性と比較して低く、日常生活の不安において女性独居の平均値が他3基本属性と比較して高いことがわかった。また、集団としての特徴をみると、男性では世帯構造の違いが評価に影響していることが示唆された。一方、女性では世帯構造の違いに関わらず、共通した傾向があることが示唆された。基本属性ごとの年齢別および都市規模別の比較では、後者の影響はみられないことがわかった。

3種類の生活意識のクラスタでは、日常生活の楽しさを感じるクラスタの種類は性別、日常生活の不安を感じるクラスタの種類は性別と世帯構造、日常生活の生きがいを感じるクラスタの種類は世帯構造が影響していることが示唆された。反対に日常生活の楽しさ、日常生活の生きがいにおいて否定的なクラスタは性別が影響していることが示唆された。基本属性ごとの年齢別および都市規模別の比較では、後者の影響はみられないことがわかった。

以上を踏まえると、生活意識の課題においては、楽しさ、生きがいでは男性独居、不安では女性独居に注力することが必要であると考えられた。また、QOL向上、すなわち楽しさの向上、不安の改善、生きがいの創出に向けたサービスデザインにおいては、性別の違いを基本としながら、男性では世帯構造の違いも加味した上で、3種類の生活意識から抽出された各因子をサービスの基本的なコンセプトとして、クラスタの特徴を踏まえたアイデアの検討が可能であると考えられた。

謝辞

本研究は、JSPS 科研費「JP15H01761」の助成を受けたものである。

注および参考文献

- 1) 河野敏鑑, 倉重佳代子: 超高齢未来に向けたジェロントロジー (老年学), 研究レポート No. 389, 富士通総研 (FRI) 経済研究所, 2012
- 2) 鈴木隆雄, 灌珍嬢: 日本人高齢者における身体機能の縦断

的・横断的变化に関する研究, 厚生学, 53(4), 1-10, 2006

- 3) 国立社会保障・人口問題研究所: 人口統計資料集 2018, 人口問題研究資料集第 338 号, 2018
- 4) 土堤内昭雄: 高齢者の社会的孤立について—地域に居場所をつくる, ジェロントロジージャーナル No. 10-002, ニッセイ基礎研究所, 1-6, 2010
- 5) 前田展弘: QOL (Quality of Life) 研究の潮流と展望—ジェロントロジーの視点を中心に—, ニッセイ基礎研究所レポート, 32-37, 2009
- 6) 出村慎一, 佐藤進: 日本人高齢者の QOL 評価—研究の流れと健康関連 QOL および主観的 QOL, 体育学研究, 51(2), 103-115, 2006
- 7) 下村芳樹ほか: サービス工学の提案—第 1 報— サービス工学のためのサービスのモデル化技法, 日本機械学会論文集 (C 編), 71(702), 669-676, 2005
- 8) 内閣府政策統括官 (共生社会政策担当): 平成 26 年度一人暮らし高齢者に関する意識調査, <https://www8.cao.go.jp/kourei/ishiki/h26/kenkyu/zentai/index.html> (参照日 2015 年 10 月 22 日)
- 9) 内閣府政策統括官 (共生社会政策担当): 平成 26 年度高齢者の日常生活に関する意識調査結果, <https://www8.cao.go.jp/kourei/ishiki/h26/sougou/zentai/index.html> (参照日 2015 年 10 月 22 日)
- 10) 内閣府政策統括官 (共生社会政策担当): 平成 21 年度高齢者の地域におけるライフスタイルに関する調査結果, <https://www8.cao.go.jp/kourei/ishiki/h21/kenkyu/zentai/index.html> (参照日 2015 年 10 月 22 日)
- 11) 内閣府政策統括官 (総合企画調整担当): 平成 14 年度一人暮らし高齢者に関する意識調査結果, https://www8.cao.go.jp/kourei/ishiki/h14_kiso/pdf/0-1.html (参照日 2015 年 10 月 22 日)
- 12) 内閣府政策統括官 (共生社会政策担当): 平成 25 年度高齢者の地域社会への参加に関する意識調査, <https://www8.cao.go.jp/kourei/ishiki/h25/sougou/zentai/index.html> (参照日 2015 年 11 月 24 日)
- 13) 大都市 (東京都区部と政令指定都市), 中都市 (人口 10 万人以上の市 (大都市を除く)), 小都市 (人口 10 万人未満の市), 町村の 4 区分。
- 14) IBM SPSS Statistics 23
- 15) 両側検定による残差分析の有意確率は, $|r| > 2.58$ ならば, $p < 0.01$ $|r| > 1.96$ ならば, $p < 0.05$ となる。なお, 表中においては, $r > 2.58$ は濃赤, $2.58 > r > 1.96$ は薄赤, $r < -2.58$ は濃青, $-1.96 < r < -2.58$ は薄青で表示した。